
永遠

篠義

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

永遠

【Nコード】

N7151P

【作者名】

篠義

【あらすじ】

関西夫夫

関西弁で、字書きはできるのか？ で、はじまった、このお話。

意味がわからない言葉があれば、連絡ください。ははははは。

そのいち

永遠なんてものはない。

人は変わるし時代も移っていく。

だが、変わらずにいる努力は出来る。

他の余計なものが変わったり流れても、変わらずにあればいいと願うことはできる。

「結婚？ また、無茶なことを言い出したで、このあほは。」

唐突に、出された書類に目を遣って、浪速は苦笑した。そこにあるのは養子縁組の書類だ。確実な繋がりが欲しいと、同居人は考えたらしい。

「せやけどな、水都。」

「それで養子縁組して、それでも別れることがあったら、おまえ、どうするつもりや？ こんなご大層なもんやってからでは遅いんやで？」

からかうように言ったら、ものすごい鬼の形相になった。だが、まだ笑っていられる。元々、こいつはノンケで、どこでどう蹴躓いたのか、俺を抱いた。

・・・だからな、もし、そういう女性が出てきたら、おまえは、そちとくつついたらええんや・・・

永遠なんてものはない。今の気持ちが変わらないという保証もない。ただ、この時間は大切ではあるけど、それで縛ってはいけない。自分にはないだろうが、それでも擦れ違うことがあるかもしれない。だから、確約なんてしたくない。

「本気か？」

「本気や。おまえ、これやってもうたらホモ確定の上、公表するよ。うなもんやぞ？ そんな怖ろしいことはせんでもええやないか。」

まだ就職したばかりで、右も左もわからないというのに、なんとおもしろいことを考える、と、俺は笑った。出会う機会が増えていくのだ。これから、こいつにも出逢いがあるはずだ。

「俺は離さへんつつ。」

「今はな。・・・せやな、三十年しても一緒におつたら考えたらんでもない。」

よくよく考えたら、俺は生きてるか？ の年数だ。そんなに長く生きているつもりはない。でもまあ、約束するなら、そのぐらい長いほうがええやろとは思った。三十年なんて時間、変わらずにいるのは難しい。静かに、ただ寄り添っているだけなら、どうにかなるかもしれない。けど、現実には働いて食べていくのだから、世間と付き合つていく必要がある。ふたりしかいない、という状況ではないのだから、何が起こるのかわからない。

「俺は、絶対に、おまえを離すつもりはない。もし、ほんまに、おまえが好きやと思う女が出来たとしても、別れるつもりはない。」

「おおきに。」

たぶん、俺は、特別な存在なんてものは作らないだろう、と、自分でもわかる。少し壊れているらしい俺は、他人は他人でしかない。それに感情を向けるというのが苦手だ。どういうわけか、花月だけは、それなりの感情がある。だが、それは、俺のほうの言い分で花月のものではない。

「そんなに深く考えんでもええやろ？ とりあえず同居するけど、成り行きで、また、その時に考えたらええやないか。そうでないなら、俺は別に家を借りるで。」

「おまえ、それつつ。そんなん、絶対にあかんつつ。」

卓袱台に置いたタバコを手にしようとしたら、押し倒された。花月は、ただいま盛り上がっている。だから、この話は、いつまでも平行線だ。それなら、勢いで誤魔化しておこう、と、俺は倒されて、そのまんま力を抜いた。

・・・そういや、俺、ここんどこ、女とやってないな。・・・

目の前に迫ってくる顔を眺めつつ、そんなことを考えていた。この関係になつてから、俺は、こいつ以外とやっていない。そして、俺はつつこまれる役をやっているから、つつこむほうは、かなりご無沙汰だ。別れたら、俺、もう、できへんかもしれへんな、と、そんなことばかり考えていた。

結婚なんてものは、自分にはできないものだと思っていた。といつか、あまりやりたくないが正解だ。適当に遊んで付き合える相手を、変えていくほうが楽だからだ。それが、どうしても手放せないものを抱えてしまつて考えが変わつた。

抱えてしまつたのが、女だつたら、結婚したいと言わなかつただろう。面倒だという理由で。俺は、べたべたと束縛されるのが苦手だ。適度に距離を置いてくれる相手なら問題はないのだが、そういう女性にお目にかかったことはない。いや、最初は、距離があるのだが、どこからか、それが狭められて、仕舞いになくなる。学生時代に、いきなり部屋に来て、掃除なんて始められて閉口したことがあつた。掃除自体は有り難いのだが、料理を作るとかし始めて、まるで、その女のテリトリーかというぐらいに侵食されてしまうと、俺は窒息するのだ。

ずつと喋っていることも面倒だし、何よりべたべたと擦り寄りられるのが面倒だ。やるだけの関係なら、それでいいだろうと思つていたら、最初は、それでも、やはり変化していく。俺が、女の所有物みたいな扱いになるのがイヤだつた。だから、もし、手放せないと思つたとしても、となり同士に家を借りるぐらいのことになつたはずだ。

そつという意味では、浪速は理想的だつた。相手が俺より無頓着で、束縛が嫌いという相手だつたからだ。それなのに、俺にだけ馴染ん

でいた。ふたりして、同じ部屋で別々に過ごすのも当たり前、下手をすると食事も別々なんてこともあるほど勝手気儘で、時たま、俺が料理すれば、浪速は嫌がりもせず食卓につく。食べたら、後片付けもしてくれる。そんな関係だ。

そして、浪速は放置すると、生きていくだけの状態になるので、手をかけようと俺が動くことになる。でも、それで、浪速は感謝することもないし、べたべたとくつついていくこともない。それが、俺には何よりだった。傍に体温があるけど、それに束縛されることがないというのが、俺には有り難いことだった。

「おい、研修は、第二会議室やで、吉本。」

就職して、最初の二ヶ月は研修が、ほとんどだ。一応、部署は決められているが、そこに座っているのは一日の半分がいいところで、後は研修で同期一同で、知事や収入役の有り難いんだか、なんだかわからない話とか、実際の実務とかの勉強をさせられる。定刻には終るから、これで給料がいただけるというのは、申し訳ないほどだ。

「今日はなんやった？」

「正しい地方財政の知識とかなんとかやった。」

同期で仲良くなったのは、隣の課にいる御堂筋という男で、適当に付き合うには、ちょうどいい感じの男だ。それとつるんでいれば、聞き漏らしたことを、お互いに補完もできる。

「今夜、コンパらしいで。年上のおねえーさんたちと。」

「え？ そうなんか？」

「あれ？ 連絡行つてへんか？」

「およ？ いきなり、はみごが？ と、御堂筋はからかうが、実際は、俺が課内の連絡メールの確認をしていないだけだ。」

「俺、パス。」

「そうか、ほんなら知らんかったで通しとき。」

御堂筋という男も、割と気楽で気良しで、付き合うのは楽だ。わざわざ、出るとは言わない。それで、俺がハミゴになっても、こいつは気にしないだろう。

その日の研修の後で、予定表を買って、ちょっと顔色を変えてしまった。これから二週間、県内の施設を各人が研修という名目の雑用に借り出されるということだったからだ。それも、女性陣は自宅から通えそうな場所だが、男のほうは県境に近いような僻地ばかりだ。つまり、そういう場所の雑用を一年に一度やらせようという魂胆なのだろう。俺の行き先は、とんでもなく僻地で、隣りの県へ買物に出たほうが早いような場所の、営林署事務所だ。

「なんで、地方公務員が、国家機関へ行かなあかんねん？」
「たぶん、人手が足りてないからやる？」

もちろん、御堂筋も同様で、俺とは違う村の役場だった。二週間のうち、土日は休みではあるが、車がない俺は戻るには、バスしかない場所だから、かなり厳しい。

「……大丈夫かな……」

だが、行かないわけにもいかない。家に帰って、同居人に、そう告げたら、「気をつけて。」と、だけ言われた。

「ちゃんと戻ってくる。」
「わかってる。」

その頃、水都は携帯を持っていなかった。だから、電話するのは自宅しかない。毎日、声だけは聞かせようと思っていた。

けれど、営林署事務所の仕事は、かなりハードで、毎日とはいかなかったし、同居人が帰りが遅くて捕まらないことが多かった。一週間して、慌てて休みに戻ろうとしても、仕事があって戻れなかった。

キツカケが何だったか忘れたが、女と知り合った。それで、その女の家に雪崩れ込んだ。相手は、ちょっと酔っ払っているの、ぱっぱと服を脱いでいる。

「あのな。」

ベッドに飛び込んだ女の勢いで、ものすごい音がした後で、俺は口を開いた。

「今更、何？ あ、ゴムは、ここ。」

「いや、そうやない。俺、ここんどこ、やってないから下手かもしれへんので、やって欲しいことは言うてくれると助かるんやけど。」

「え？ 童貞？」

「まさか、この年で童貞やったら怖いやろ？」

「できない事情があったとか？ もしかして、お勤めでもしてた？」

「お勤め？ ムシヨには入ってない。やるほどの元気がなかっただけや。」

「不能？」

「それもない。ものすごく下品やな？ あんた。」

そうかなあー、と、女は大笑いしているが、「命令したげるからはよおいで。」と、手をヒラヒラと振っている。まあ、どうにかなるやろ、と、俺も服を脱いだ。女って柔らかいなあーと女の胸に手をやって、ちょっと感慨に浸った。ここんどこ、硬い胸しか揉んでいないし、自分から能動的に動くのもなかった。やり方は似たようなものだが、何かが違うのは当たり前で、抱いても気分的にすつきりするということもないもんだ、と、感心もした。

「うまくはないけどさ。その不満顔は、なんやろ？」

一回戦が終ってから、水分補給している女は、まっぴで俺の前に仁王立ちする。

「・・・ものたりへんのや。」

「じゃあ、二回戦？」

「もちろん、それはかまへんよ。でも、一緒やと思っわ。」

「あたしのテクがなってるない？」

「いや、それもちゃうわ。強いて言うなら、俺が、こういうセックスと縁遠かったからやと思う。」

「どんなセックス？　もしかして、縛れとか言う？」

行きずりの女なので、別に隠すこともないだろう。それに、こんなに明け透けに言われると、反って言いやすい。

「俺、ここ二年くらい男としかしてへんかったんよ。」

「え？」

「それも、俺、女役してたからな。せやからものたりへんのや。」

女は、あんぐりと口を開いて、それから馬鹿笑いを始めた。「信じられへんっつ。」と、何度も言うて、俺の裸の肩をパンパンと叩く。

「いやあーネコの人とやるなんて貴重な経験やわ。」

「ネコ？」

「女役のこと。ちなみに、男役はタチ。これ、レスでも一緒やから。・・・えーっと、つまり、普通のセックスができるか試してみたということやるか？」

「そうやな。できることはできるってわかったわ。」

だが、あんまり満足できる気分ではなかった。すっかり、抱かれるということに慣れてしまっているらしいとは確認できただけだ。

「今、フリーなわけや？　ネコの人。」

「いいや、二週間、留守なんや。俺の旦那。」

「ほんで、浮気してんの？」

「浮気なあー、これは浮気って言うんやろうか。」

「まあ、浮気やと思う。でも、二週間限定なんやったら、しばらく相手してもええよ。あんたみたいなのは珍しいから。」

一人で家に戻るのが億劫だった。ついでに、適度に運動して、ノーマルな性生活というのに慣れるのもいいかもしれない。もしかしたら、そのうち、終わりが来るかもしれないのだから、また、こういう生活になるのかもしれない。予行演習をするには、この女は、いい相手だとも思った。

「ほな、頼むわ。」

「とりあえず、名前聞いとこか？　ネコの人。」

「タマ言うねん。」

「へー。タマなんや。ほな、タマ、おいで。」

「おまえこそ、なんて言うんや？」

「ミケでどう？」

「ふーん、ミケ？ こてこてのボケやのー。」

「あんた、自分のほうがこてこてやっていうんよ。」

ふたりして大笑いして、またベッドに戻った。まだ、二週間先にしか帰ってこない相手のことは考えても仕方がない。

適当に待ち合わせて食事して、それから、女の家に戻ってやるという毎日のうちで、ゆっくりと俺は同居人のことを忘れていく。

一週間して、俺は、女に、「ここに住み着いてもええか？」

と、尋ねた。女のほうは、気にした様子もなく、「好きにしてええ。」

「と、合鍵を差し出した。」

「ほな、着替えとか取りに行くやろ？ クルマ出すわ。」

「悪いな。」

「かまへんかまへん。ここんどこ、奢って貰ってばかりやからなあ、タマに。」

「ミケの家使わしてもうてるから家賃やと思ってくれたらええ。」

クルマで、自宅からスーツと着替えを、いくつか運んだ。女もついてきたので、名前がバレた。「水都やなんて、かわいい名前やんか、タマ。」と、女は笑って、自分の名前も公開してくれた。千佳は、とてもおおらかで優しい女だと思った。

それから、一度も自宅だと思っていた場所には帰らなくなった。

「そろそろ二週間やけど、旦那はええの？」

女がそう言うので、俺は、「旦那って、誰？」と、答えた。

「え？」

「俺、男やで？ 旦那って、おまえのか？ それ、俺と違うんか？」

「ええ？」

千佳は、ものすごい顔をしていたが、俺には、何のことやらだ。そろそろ、籍でも入れなあかなあーと、俺は考えていたのだが、別の相手がいるなら家から追い出されるかもしれないな、と、ちょっと落ち込んだ。

異変というのとは違うのだが、こいつ、どっかおかしいと気付いたのは、昨日のことだ。二週間限定の相手をする、互いに確認したはずなのに、それを忘れていた。ついでに、ネコをやっていた水都は、それすらも忘れているし、さらに怖いのは、自分が旦那持ちの男だということすら忘れていた。水都の家には、表札がふたつ並んでいて、どっちも男性名だった。それに、何度かやっていけば、明らかに、水都は抱かれるほうの立場だとわかった。それなのに、当人は、それを、すっぱりと忘れていた。たかが二週間で、そんなことは可能なのだろうか。

今日なんて、とんでもないことを言い出したので、絶句した。入籍したほうが、はつきりしていいのではないかと、言うのだ。

「あんだ、正気？」

「なんで？ 同棲して、それでやることやってんねんから、それが正しい流れやろ？」

「家に帰って、事実を自覚したほうがええんちゃう？」

「家？ 俺の家、ここやろ？」

「はあ？」

記憶喪失ではない。ちゃんと仕事はしているらしいし、こちらのことでも理解している。ただ、旦那のことだけが抜け落ちているのだ。

それはもう、はつきりすつぱりと。

「吉本花月って名前は？」

「え？ 大学の同期やったと思うけどな。」

さすがに、これは演技ではないと背筋が寒くなった。最初の夜に、旦那がいることを告げた水都は、とても嬉しそうに、旦那のことを言っていたからだ。それが、名前を出しても、そんな反応しかしないのはおかしい。もしかして、別れたかったのか、とも、いぶかしんだものの、「家に帰っても寒いから。」と、二週間限定の約束をした時は寂しそうに笑っていた。何が、どうなったら、こうなるのかわからない。当人が、そう言うのなら、しばらくは、ごっこ遊びのつもりで付き合うか、と、腹を括った。

だが、そうではないことにも、すぐに気付いた。真夜中に、悪戯してやったら、「花月、もっと。」と、嬉しそうに呟いたからだ。

「……なぜ？……ていうか、どうなってるんよ？ これ……」

相手は、二週間限定で出張だと言う。ならば、そろそろ戻っているだろう。直接、相手に問い質し、別れ話がこじれているのか、痴話喧嘩なのだとしたら、早々にお引取り願いたい。幸い、自宅の場所は覚えている。今夜にでも出向いてくるか、と、朝の出勤前に、ダイニングテーブルに座っている水都に、「今夜は、会社の宴会やから遅くなる。」と、告げて出勤した。

それに

二週間ぶりに、我が家に帰ったら、誰もいなかった。いや、なんていうか、誰も住んでいない部屋になっていたが正解だ。生活感が一切ない。あのボケのベッドのシーツが、綺麗なままだ。ゴミ箱も、おそらくは二週間前の吸殻と思しきものしか入っていない。

……どういふことや？……

もしかして、あつちも出張か？ と、思ったものの、そんなものはないだろう。連絡すれば、ヤブヘビになるから、おいそれと職場に確認するわけにもいかない。もしかして、俺が帰るまで、向こうの職場の寮へでも避難したかと、良いほうに考えて、とりあえず洗濯物を洗うことにした。それから、食べるものもないので、仕方ないから、コンビニで行って、適当なものを買ってやることにした。

もし、この週末に帰ってきていひんかったら、職場へ押しかけるかと、コンビニで、そんなことを考えつつ、メシだけ買った。あのボケは、仕事だけは休まないようにしているから、そこには確実に居るはずだからだ。

……やっぱり、携帯持たせたほうがええかな……

いや、今回の場合は、携帯があっても圏外であったから意味はないのだが、それでも、これから連絡を、すぐにつけられるという利点はある。どこにいるのかわからないのでは、話にならない。

……あんまり出張とかないとは思っけど……

度々、こんなことになるのなら、出張がない部署に転属するほうがいい。たぶん、あのボケは食べていないだろうし、また、生きてるだけ状態になっているだろう。具合が悪くなっていないことを願っているが、二週間は長すぎる。

ふう、と、溜息をついて、ハイツの階段を登ったら、俺の家の前に誰かが立っていた。

「水都っつ？」

慌てて、近寄ったら、まったく見ず知らずの女だった。しかし、その女、あるうことか、俺に向かって、「どあほつつ、遅いんじやつつ。」と、叫びやがった。

「はあ？ あんた、誰？ ていうか、俺、喧嘩売られてるんか？」

「浪速水都の旦那？」

「え？」

「さつさと質問に答える。このあほ。」

ものすごい剣幕なので、「せや。」と、俺が頷くと、「水都と喧嘩した？」と、さらに尋ねられる。

「え？ 二週間逢うてないから、喧嘩なんかできへんぞ。て、あんた、水都のこと知ってるんか？」

「知ってるも何もつつ。ちよつと聞きたいねんけどな、水都は、どつかおかしいとこある？ いきなり記憶喪失とかなるような体質なん？」

「はあ？ 記憶喪失？ え？ あいつ、入院とかしてるんか？ どつか怪我でも？」

そうかそうか、ぼあーつとしとつて交通事故にでも遭うたか、と俺は慌てたものの、安堵した。そういうことなら、いないのは当たり前だし、俺に連絡が来ないのも仕方がない。だから、俺は籍を入れようと言ったのだ。こういう時に、困るから。

家の鍵を開けて、慌てて保険証と着替えの準備をしようと思ったら、女が、ちやうちやうと、俺の腕を掴んだ。

「うちに二週間居ついてるんよ。そやけど、おかしいんよ。水都、あんたのこと知らんって言っんよ。それに、いきなり、あたしと結婚するとか言っしつ。あれ、どつか絶対におかしいつ。あれは病気なん？」

女の切羽詰ったような言葉に、俺は一端、凍った。

……結婚？……

以前、水都が考えていたことだ。生きている間、家族というものがあるべきだから、さつさと結婚して子供でも作って生活するのが

普通だ、と、考えていた。それは、非常に正しい意見なのだが、それには根本的な欠陥があった。水都は愛している相手と結婚するというのではなくて、言い寄ってきた相手と結婚すると言ったからだ。結婚の意味がわかっていないと、俺は叱ったが、水都には、それがわからなかった。かなり壊れていると判明したのは、そんなことがわかってからだ。

・・・また、戻りやがったな、あの野郎・・・

元の状態に戻っているらしい。たぶん、この女と、どうにかなたから、それで結婚してしまえばいいとでも思っているのだろう。そんなものは幸せではない、と、俺は何度も言ったのに・・・そして、結局、俺は、その水都だからこそ、一緒にいることを選んだのに、それすらも記憶から抹消するつもりでもあるのだろう。

「ちよつと、こんなところで、フリーズしてる場合やないのっつ。答えてっつ。」

ぼおつと立ち尽くした俺の胸に、思い切り裏拳を入れて、女が叫ぶ。そら、混乱するだろう。遊びのつもりだったろうに、いきなり結婚とか言われたら、誰だっつてビビる。

「あれ、壊れてるねん。あんた、遊びで付き合ったんやろ？」

「そう。二週間限定でっつ、最初に約束したんよ。ネコの人なんて珍しいし、それなりに顔も好みやったから・・・壊れてるって何？」

「えーつと、うちのネコの人な、普通の家庭を築いて生きているのが幸せなことやと思ってるんや。相手のことが好きやから一緒におりたいとか、そういうんではなくて、形式美に憧れてるっちゅーか、なんていうか・・・て、あんた、なんぼほどストレートなんや？

ネコの人って、おいっつ。」

「あんたのこと言つてもわからへんねんで？ あんたら、カップルなんやろ？」

「だから、俺が二週間も留守したから、俺がおらんことに耐えられへんかったから、さらに壊れたというところちゃうかな。」

俺のことを忘れれば、俺の代わりが必要になる。ひとりが好きだった水都に、一人は寂しいと、俺は教えてしまった。だから、一人が楽だという感情が水都からはなくなった。その代わり、誰かが傍に居ることが必要になった。

「・・・やっぱり、二週間ってあかんねんな。」

「二週間で忘れられるわけがないやろっつ。」

「いや、あいつならできると思う。ほんで、あんたは、結婚するつもりはないんか？ 一応、老婆心から言っつが、あいつは、好きとか愛してるなんてことは思てないからな。」

「できるかあああああつっ。」

「まあ、せやろうな。でも、あいつ、俺を忘れてるんやっつたら、このまま、じわじわと侵食してくと、あんたのことが好きになると思う。そういう生き物やから。」

「どあほっつ。あれは、ネコの人っつ。ネコがタチやっつて満足するわけないやろがあああつっ。ネコは入れられて、なんぼじゃっつ。」

「うわーストレート剛速球に下品やな。」

あけっぴろげた意見に俺は大笑いだ。どう見ても、俺より、ちょっと上くらいの女なのに、どこかおっさん臭さがあるような勢いだ。こんな女だから、水都も自分のことを話したんだろう。これだけはずきりと言われたら、こっちはづきりと言いたくなる。

「方法はいろいろあるで？」

「そんなことはええっちゅーのよっつ。それより、あんたに質問。」

「おう。」

「水都はいらん子？」

「いいや。ものすごくいる子。」

「あんたら、別れ話とかは？」

「そんなんあるわけない。あいつ、俺と暮らしてること自体が同居というレベルにしか考えてないで？」

「でも、やることはやっつてんねんやろ？」

「そら、まあ。」

「水都が好き？」

「うーん、好きとかいうレベルではないねん。傍におって欲しいんですよ、俺としてはな。水都の世話してないと、どうも調子が狂う。」

あれが、傍に欲しい。たぶん、水都も深いところでは、そう思っている。自覚はないだろうが、本心は知っている。だから、愛してるなんて言うて欲しいわけではない。ただ、傍におって、寛いでくられてたら満足やと俺は思っている。その程度の距離にいられるのは、俺しかないと自負している。

俺が、うつすらと笑ったら、女は、ふんつつと鼻息であしらって、「わかった。」と、ダンと床を踏み鳴らした。

「ほんだら返す。でも、あんたのことを忘れてることを、どうしたらええの？」

「さあ、まあ、とりあえず、うちに拉致して、徐々に慣れさせるとかでええかな。」

「それやったら、部屋を提供するから、やって。」
「え？ いや、見ず知らずのあんたの家でやるのは、どうよ？ 俺、公開エッチとかしたいほうとちゃうし。」

とりあえず、酒でも飲ませて、久しぶりに泣き虫にでもなってもらうか、と、俺は笑った。あまり使いたくはないが、忘れてしまったなら、奥底の本物の水都に尋ねるしかない。俺が必要か、そうではないか。必要であるなら、拉致でもして馴染ませてやることはできる。

「うちの人のな、心が繋がってないねん。」

ほんま、なんで、二週間で忘れるんやろうと、俺は、また苦笑する。生きてるだけの人生なんて意味がないっていうことが、心の奥ではわかってるくせに、それが表まで辿り着かない。

「なんとなく意味はわかったわ。ほんで、具体案は？」

「ていうか、あんた、ほんま、変わった人やな？ あんなボケを、よう保護しといてくれたで。」

「しゃーないやんかつつ。夜中に悪戯したら、『花月、花月』って、

何度も嬉しそうに抱きつかれたら情も湧くわっつ。・・・あーー
ーむかつくっつ。あんた、一発、殴らせてっつ。」
と、言いつつ、その女は、カバンで俺を殴った。許可出す前に殴
ってるしな、この女。なんで、また、こんなけつたいな女を選ぶか
な、水都は。

会社の飲み会があるとかで、いつもより遅く戻ってきた千佳は珍
しい男を連れて来た。俺の大学の同期で吉本という男だ。同じ語学
の授業をとっていただけの知り合いなので、顔もうる覚えだが、一
応、挨拶されて思い出した。

だから、第一声は、「あんた、誰？」と、言ってしまったら、
吉本は微妙な顔をした。それほど親しい間柄だったわけではないの
だから、覚えていただけでも有難いと思ってくれ、と、内心でツツ
コんでおいた。

「なんで、吉本が？」
「あたしの同僚。たまたま、話したら、水都と知り合いやってわか
ったの。」

「『あんた、誰？』はきつついー発やわ、浪速。」
「しゃーないやろう。語学で一緒しただけやのに、一々覚えてられ
るかいな。」

だが、どうしたことが、唐突に、俺は涙腺が緩んだ。目にゴミで
も入ったのか、いきなり涙が溢れてしまった。

「あれ？　なんで？」
「いやあー、そんなに吉本君と再会できて嬉しいのん？　妬いちゃ
うよーんっつ。」

「おいおい、千佳。それはないやろう。」

自分でも、どうして涙なんて零れるのか、わからない。顔を洗つてくると洗面所に逃げた。なぜ、吉本の顔を見たら、涙なんだ？と、混乱するしかない。

気持ちを落ち着けて戻ったら、いきなりビールとか乾き物とかが食卓に乗せられていた。久しぶりの再会なので祝宴だあと、千佳と吉本は盛り上がったている。

「はい、ほな、乾杯。」

缶ビールを手渡して、カチンと音をさせた吉本は、嬉しそうに、それを飲んでいいる。

「俺は別に嬉しいないで？」

「まあまあ、世間が狭いってことを祝おうやないか。」

「そうそう、なかなか大学の同期なんて卒業したら音信普通なんよ？ 水都。こういうのは、祝うべきやから。」

どうせ、明日は休みやから、無礼講モードで、と、さらに、千佳が盛り上げる。俺は、それほど飲むほうではないから、ちびちびとビールを啜っているが、千佳は豪快だ。ぐいっと一気に空にする。

「なんで酔わへんの？ 千佳は。」

「女のほうが、アルコールの分解量は多いもんなんよ。ほら、水都。そんなまずそうに飲んでんと、ごくごくいって。」

当たり障りのない世間話をしながら、急かされるように、缶ビールを空けた。まあまあ、もう一本と手渡されて、少し気分が軽くなつて、ごくごくと飲んでしまったら、急に酔いが廻ってきた。

「氷食べるか？ 水都。」

「・・・うん・・・」

「千佳ちゃん、氷作ってる？」

「ごめん、作ってない。」

「うーん、水やと覚めへんのよ、こいつ。」

「ていうか、水都、こんなに弱かったかな。もうちょっといけてたはずやけど。」

そういや、缶ビール二本ぐらいで、こんなに目が廻るなんていう

のは、久しぶりだ。仕事で飲んでいる時は、大瓶三本くらいまでなら付き合っている。というか、その会話に、どこかでひっかかった……なんで、吉本が、そんなこと言うねん？……とりあえず、ちょっと横になれ、と、俺は身体を支えられて床に寝かされた。

「俺の嫁は、なんで、そんなに壊れてるんかなあ。かなんなあ。」
吉本が、そう言って、俺の頬を撫でたら、急に何かパリンと割れるような気分になった。あとは、ただ、温かい気分の浸ったと思う。

なるほど、と、千佳は感心した。心が繋がらないというのは、こういうことか、と、涙が流れて呆然としている水都を目にして納得した。たぶん、逢いたかった旦那の顔が見られて嬉しいのだろうが、それを自覚できないらしい。それから、乱暴に飲ませて酔わせることにして、それも呆気なく酔っ払ったのも驚いた。

道すがらに打ち合わせてして、コンビニに買い物してきた。吉本も酒には弱いというので、彼分だけノンアルコールビールだった。それが、わからないように種類をたくさん買い込んで来たから、水都は気付かないままで飲んでいる。

「あいつ、銘柄とか気にしてへんから気付かへん。」と、吉本が言った通りだ。全然、そんなものは気にしていないし、会話も、おざなりに付き合う程度だ。関西人という人種は、こういう時、便利だ。まったく知り合いでなくても、ノリで適当に会話できる。だから、盛り上がっているフリで、吉本と会話を続けていたら、水都は缶ビール二本で、ふらふらと揺れだした。

「横になれ。」

身体を支えて、吉本が床に寝かせる。座布団で枕まで作るのが、

かなり世話好きであるという証拠にもなっていた。それから、ふうと息を吐いて、「俺の嫁は、なんで、そんなに壊れてるんかなあ。かなんなあ。」と、苦笑して水都の頬を撫でたら、唐突に、本当に唐突に、水都は起き上がって、吉本に抱きついた。

「……え？……」

「花月つつ、花月つつ、どこ行ってたん？　なんでおらへんのつつ？　俺、消えてまうやんつつ。」

泣き喚くみたいに、わあわあと同じことを繰り返して、吉本の首にしがみついている。吉本のほうは、ほっと安堵した顔になって、起き上がってきた水都の背中を撫でている。

「ごめんごめん、仕事で出張やった。ごめんな、水都。」

「いややって言うたのにつつ。花月、おらんとあかんのにつつ。」

「うん、せやな。俺が悪いな。もう思い出したか？　うち、帰るか？」

「……うん・・・帰る・・・ひとりいやや・・・」

「ひとりにはせえーへんよ。ちゃんと帰って来るから。」

「……うん・・・」

その光景に、うわあーえらいもん見せられるなあーと笑ってしまった。というか、この顔の水都を知ってたら、そら、あんだ、結婚して縛り付けとこうと思うわな、と、納得もした。たぶん、酔って出て来た言葉が水都の本音というもので、えらくクールな男やと思っていたら、とてつもなく甘ったれなネコだったのだ。

「確かに、このギャップは萌える。・・・せやけど、あたしと飲んでる時は、こんなにならへんかったけどなあ。」

この二週間、結構、飲んでいたはずだ。こっちに付き合っていたのだから、ビールの大瓶を何本か空けていたのだ。だが、その時の水都は、こんなことにならず、終始、ほろ酔いぐらいで穏かだった。独り言のように呟いたら、吉本が、「これは、俺専用の顔やからな。」と、嬉しそうに返事してきやがった。水都を抱かえてなかったら、蹴り入れたるとこやけど、水都がまだ、ぐずっているのさ。

すがに控えた。

「千佳ちゃん、悪いねんけど、タクシー呼んでもらえへんか？」
ぐすぐすとひつついていいる水都をあやすようにして吉本が頼んでくる。大人一人を抱えて帰れる距離ではないから、そういうことになる。

「あー、それやったら、うちの車で送ったげるわ。」

「ええんか？ 悪いな。助かるわ。」

「いや、ええもん見せてもろた礼ということ。」

「自分、ほんまに凶太いな？ 普通、ホモの愁嘆場なんか見たら退くで？」

「そのネコの可愛さが救いやろな。」

「ああ、うちの嫁、可愛いやろ？」

「あんだ、それ、水都、寝かせて、ちよつとこつち来い。」

「いや、遠慮する。」

ちつつ、見破ったか、と、笑って駐車場からクルマを出してくるために、家を出た。戻ったら、水都は寝ていて、吉本が担ぐようにして車に乗せた。後部座席へ転がしておくのかと思ったら、本人も後部へ座る。寒くないように、と、自分の上着をかけているのが、いつそ清々しいほどに、いちゃいちゃだ。

「荷物は、また引き取りに行かせてもらうから。」

「そうしてくれるかな。・・・あのさ、ちよつと聞きたいねんけど？」

「なんやろ？」

「もしかして、今度は、あたしが、『あんだ、誰？』になるわけ？」

「うーん、たぶん、そうなるんちゃうかな。実際、現場を見たことはないけど。」

「お礼にエツチ見てもええ？」

「え？ 本気か？ 勘弁してや、そんなん。萎えるて。」

「混ざらしてもろてもええけど。」

「・・・千佳ちゃん・・・それ、本気やないよな？」

「やったことないから楽しいかと思つて。いや、普通の三人はあるよ。でも、ほら、普通やないやんか？ そんな見られることはないやろうし。」

かなり興味はある。世間に、そういうビデオが出回っているが、さすがに、そこまでして見たいものではないが、機会があるならば、とは思つた。だが、吉本は、大袈裟に溜息をついて、「あんな俺が言うのも変な話やと思つけどな。遊んではかりおるんもどうかと思つて。」と、説教じみたことを言い出したのには閉口した。

「水都みたいなのは、あんまりおらんやろうけどさ。もつと暴力的なヤツとかと当たつたら、どうするつもりなんよ？ もし、俺が死んだりして、戻つて来られへん事態で、水都が、あんたのそこへ転がり込んでたら、こんな簡単には解決してへんねんで？」

「人を見る目はあるつて。ていうか、こういうあたしやつたから、びびつて追い出しもせんと飼うといたげたんやろ？ あんたこそ、しつかりしいーよつっ。」

いや、おもしろいエッチはしていたから、そういう意味では、あのネコを飼つておく価値はあつた。だいたい、普段なら家まで、お持ち帰りはしない。そういう意味では、水都は好みにも合つていたからだ。

「ぶつさいくなんは、ホモでもゲイでもええわ。いや、むしろ、なつとけやけどさ。せやけど、なんで、水都みたいな好みの男まで、そつちかなあ。」

「それ、差別しすぎ。・・・あ・・・千佳ちゃん、飲酒運転やんけつっ。」

今まで、気付かないということとは、鈍いらしい。缶ビール二本や三本では、どうということもないし、飲酒検問をやっている時期でもないから、問題はない。

「大丈夫、大丈夫。ほら、もう着くわ。」

「コーヒーでも飲んでけよ、千佳ちゃん。ちょっと冷ましてからの

ほうが安全や。」

「ネコの旦那、あんた、お人よしとか、人から言われてへんか？」
「はあ？」

今から熱い抱擁とか、楽しいエッチが待っているはずの吉本は、それより他人の心配が先という、昨今珍しい気良しであるらしい。
「……いや、だからこそ、こんな厄介なネコを飼ってるんやろうけど……」

「ほら到着。さっさとエッチして、完全に記憶を取り戻せつつ、ネコの旦那つつ。」

「いや、それは、ええねんけどや。」

「大丈夫やって。他人の心配している暇があったら、自分のネコのことを心配しとれつつ、このどあほ。」

さっさとクルマから出る、と、齧って、ドアがしまった途端にバツクした。まだ、何か言いたそうな顔をしていたが、それは無視だ。ひとりになって、世の中は広いわ、と、しみじみとした気分になった。あんな変わった生き物が存在して、それが、旦那持ちの男で、さらに、その旦那が気良しとくると、なんていうか、世の中、何かあるかわからんもんやと思われた。

酔っ払いの千佳ちゃんは、堂々と、そのまんま帰って行った。あの飲みっぷりからすると、たぶん、酔ってはいないだろうが、それでも、ちよつと気になった。二週間、水都の相手をしてくれたのが、あんな変わった女というので、よかったと思う。普通の女やったら、騙されていたら、確実に。

そして、当人は、すやすやと寝ているので、そのまんま担ぎ上げて、ハイツの階段を登った。鍵を開けるのに難儀はしたが、とりあえず、ベッドに転がす。

・・・あんまり他人には見せたくなかったんやけどなあ・・・
奥底の水都は、とても可愛い。たぶん、今まで、俺しか知らなかった。千佳ちゃんに見せたのは緊急事態だったとはいえ惜しいとは思う。

・・・明日起きたら、徹底的にやったるからな、覚悟しとけよ、水都・・・

さすがに出張二週間で、さらに、嫁の捕獲に出たから疲れた。俺も、そのまんま嫁の横に入り込んで、目を閉じた。

翌日、かなり昼近い時間になって目が覚めた。もちろん、寝汚い俺の嫁は起きる気配もない。とりあえず、シャワーでも浴びて、すつきりするかと、起きだした。あの様子では、あのまんま寝ているだろうと思っていたからだ。しかし、風呂場の外で、ものすごい音がして、力一杯、風呂場の引き戸が開けられた。

「なんよ？」

「・・・あ・・・」

「おい、寝ボケとるんか？ 水都。」

ワイシャツにスラックスという出で立ちで水都は、泣きそうな顔をしていた。無理もないのだが、思い出させないために、何も言わなかった。黙ったままで、シャワーがジャージャーと流れているところまでやってきて、俺に抱きついた。

「・・・おかえり・・・」

「ただいま、俺の嫁。」

「・・・あのな・・・」

「うん。」

「今すぐに、やってほしいねん。」

何が、と、聞くだけ野暮やろう。千佳ちゃんの証言によると、俺の嫁は、「ものたりない」という感想だったという。そらまあ、そうなのだ。普段、やっていることをしてもらえないのだから、物

足りないという感想になる。一応、千佳ちゃんは、それなりのことはしたらしいが、まあ、それは満足できるものではなかったはずだ。「そもそも、喜んで。でも、おまえもシャワーは浴びて洗え。」

「・・・ああ、せやな。」

とりあえず、シャワーを浴びてから、俺の嫁が、「もう充分や。」と言つまで、やり続けた。メシも飲み物もない状態だと、俺の嫁は、ふらふらになってしまふ。明日は、日曜やから、ゆっくり沈没させておけるから、と、俺も容赦しなかった。この形に馴染んでしまったのは、俺も同じだ。抱けることは抱けるだろうが、たぶん、相手の到達地点がわからなくなっているだろうと思う。

「男つて、わかりやすいよな。」

「・・・ん？・・・なあ、花月・・・もう、ええ・・・なあ、もうええつて・・・もう、いやや。」

「いややわー水都さん、熱烈に誘ってくれはったんは、あーん。た。全力で、ご奉仕させてもらいますうー。」

「・・・あかん・・・て・・・俺・・・もう・・・しんどい・・・」

「はいはい、まだ、いけるで？ ほら？」

「・・・いややつてえええ・・・」

徹底的にやつてやるつもりで、手加減はしなかった。忘れたといふなら思い出させておけばいい。また忘れても思い出させればいい。そのうち、水都は本格的に泣き出して、それから潰れた。強烈な記憶で上書きすれば、その前のことなんて押し潰されてしまふ。

「・・・しゃーないよな？ おまえは壊れてるんやから・・・」

ぼろぼろに泣いた顔を覗き込んで、「二週間か。」と、その記憶の保存時間については肝に銘じた。二週間が、たぶん、ひとりである限界なのだろう。

「いや、違うか。千佳ちゃんが二週間って約束したつていうてたもんな。・・・二週間つて言つたのが悪かつたんか・・・」

知り合つて三年、付き合つて二年、同居して半年も経っていない。だから、その限界の時間は延ばすことは可能だろう。

「とりあえず、こいつを洗って、メシの支度するか。あーあーシートは廃棄したほうがええかな。」

どろどろという雰囲気のシートと、すっかり陽が暮れてしまった室内を見回して、俺は立ち上がった。

そのさん

夢現で、口に水分が流れてきた。それから、ゼリーみたいなものが流し込まれているので、目を開けたら、花月の顔があつた。

「おはようさん……ていうても、真夜中やけどな。」

「……うん……」

「腹減つてるやろ？ とりあえず、ゼリー食べ。ほんで、本格的に目が覚めたら、うどん食べさせたるからな。」

「……うん……」

出張から帰ってきた花月は、ほぼ一日、やりまくってくれた。いや、誘いはしたが、そこまでしてくれ、というた覚えはない。ただこの二週間の記憶というのが、すっぱり抜け落ちたように思い出せない。たぶん、何にも考えてなかったのだろうな、と、自嘲するしかない。

壊れていると自覚したのは、たぶん、花月と出会ってからだ。いや、それ以前には感情が欠落しているな、とは思っていたが、それほどとは思っていなかった。

カタンカタンと台所で音がしている。うどんでも煮ているのだろう。マメだと思つが、あれも一種の病気かもしれない。たかだか、一日や二日、メシを食わなくても人間は死んだりしないのに、食べないと鬼神も真つ青なほどに怒るのだ。

トイレに行こうと思つたが、腰がだるくて起き上がれない。下半身の感覚が、あやふやすぎて、起きたところで、そのまんま倒れそうだ。

「……おーい……」

叫ぼうとしたら声が枯れていた。ベッドの下に落ちている本を、苦労して掴んで、それを扉に投げた。ぼおんと鈍い音がして、それから足音が近づいた。

「なんや？」

「・・・トイレ・・・」

ああ、と、花月が肩を貸してくれてトイレまで運んでくれた。

「腹下してないか？」

「・・・いいや・・・洗ろうてくれたんやろ？」

「一応、洗ろたけど、時間経ってからやからな。途中からゴム使ったし。」

「・・・なら大丈夫や・・・ていうか、加減してくれ。そのうち、ヘルニアになりそうや。」

「はははは・・・せやな。」

文句を言つても、相手は堪えている様子は皆無だ。用を足して、連れ戻されてから、うどんを食わされた。食べたくない、と、拒否しても無理矢理、ねじ込まれるので、途中で諦めて口を開いた。ちよつど、満腹した頃に、お茶を飲ませてくれるのが、慣れというものなんだらう。

「クスリいるか？」

「・・・ん？・・・眠い・・・」

「さよか。」

ずるずると、花月が、うどんを嚙っている音がして、なんだかんだと出張の苦労について語っている。植林した苗を鹿に食われて、やり直しさせられたり、熊が出たとかでパトロールに行かされたり、都会では考えられない仕事ばかりだ。

「ほんでな、梅雨時分にも、マツタケが生えるらしいわ。」

「・・・ふーん・・・」

「おみやげに、山菜と、干した岩魚とか貰うたから、明日は山菜はんにするで。」

「・・・うん・・・」

「二週間は長かったわ。」

「・・・せやな・・・なあ、花月・・・」

「ん？」

「・・・俺・・・二週間・・・何してたか思い出せへん・・・」

もう、あかんわ。」

「それは、どういう意味の『あかん』なんや？ 水都。」

「・・・おまえおらんと・・・壊れ具合が激しなって・・・時間も何も・・・わからへんのや・・・消えることがな・・・あるんやったら・・・早めに言うてや？・・・」

花月がいなくなったら、俺は盛大に壊れてしまうだろう。それは、生きていくだけの状態なので、至極、楽な生き方ではあるだろう。だが、以前は、ちっとも感じなかった寂しい気分をくれるような気がする。誰かと結婚しても、それは消えないのだと思う。これは、となりで、うどんをかつ食らうヤツがおるからこそ、感じなくてよいかからだ。それぐらいは、壊れている俺でも、わかる道理だ。ひとりで、ベッドで目が覚めて、なんだか恐慌に陥りそうになった。今まで、そんなこと、感じたこともなかったのだから、そういうことだろう。

「あほ、もう、寝てまえ。」

「・・・なんでやるな？・・・」

「んなこと、わかりきつとるやないか。俺が嫁にしたからや。」

「・・・ああ・・・そうか・・・納得や・・・なあ、花月。」

「ん？ まだ、なんかあるか？」

「・・・もう一回・・・頼むわ・・・」

「え？ 珍しいことを言う。」

「はははは・・・ほんまやな・・・」

ぐだぐだに疲れて眠りたいというのではなくて、ただ、体温があると感じていたかった。ちよつと、待て、という声で、うどん鉢を花月は運んで行った。元気やなあーと、俺は、おかしくて笑いつつ、待っていた。

・・・籍入れるのは勘弁やけど、体温は欲しいなあ・・・

そんな、身勝手なことを考えていたら、となりに体温ができた。

もう、腰も足もぐだぐたなので、されるがままになるしかない。

平たい胸が重なって、心臓の音が響いている。以前、女とやって

た時には、それを嬉しいなんて感じたことはない。

さすがに、体力限界まで追い込んだら、死んだように寝て起きなくなった。こちらは、午後近くに目が覚めたが、水分だけ補給してやったら、また、こっくりこっくりと寝ている。夕方には、目を覚ますだろうから、晩飯の支度をしつつ、家事をこなした。誰もいなかったので、部屋は汚れていなかったが、それでも、掃除機ぐらいはかけておく。三時ごろに買い物に出ようとしたら、ぴんぽんと呼び鈴が鳴った。

「あれ？」

「荷物運んできた。」

大きな紙袋をふたつ持った千佳ちゃんだった。どうせ、まだ起きないだろうが、部屋に上げるのは気が退けて、紙袋だけ受け取った。

「水都は？」

「死んだように寝てる。．．あの．．よかつたら、茶でもしばかへんか？ 俺、買い物に出るつもりやったから、なんか奢らしてもらう。」

「あけてはもらえへんわけ？」

「わざわざ、忘れさせてなのに、思い出さすような真似はしたない。」

「なるほど。ほな、奢って貰おうか。」

納得はしたらしい千佳ちゃんは、それ以上に無理強いはしなかった。寝室の水都に、買い物に出ることだけは告げて、財布を手を外へ出る。本日も、車だった千佳ちゃんに、近くのスーパーまで乗せて貰った。スーパー近くのファミレスで、お茶にする。気の利いたカフェとかあればよかったが、うちの近所には、そういう小洒落た

店はない。適当に注文してから、俺は、礼について尋ねた。千佳ちゃんのところまで、寝泊りしていたのだから食費とか、いろいろと金がかかっているだろう、と、思っていたからだ。けれど、千佳ちゃんが言うには、食事が、ほぼ外食で、それは、水都が出していたから、別に、金銭的には必要ない、とのことだった。

「気前のええ兄ちゃんやなあーと思ってたんよ。」

「そしたら、どうしたらええ？ ガソリン代ぐらいでええか？」

「うちまで、何度か往復してもらっているから、ガソリン代ぐらいは払おうか、と、言ったら、それも却下された。」

「お金はいらんよ。まあ、二週間、それなりにおもしろかったから、それでチャラでええんとちがう？」

「そういうもんなん？」

「そういうもんでしよう。普通、遊びでやってる時に、必要経費請求するようなことは、ないからな。」

「俺は、そういう遊びはしてないんで、ようわからんのよ。」

「そら、あんた、気良しのあんたでは、やったら、即結婚とか言いそうやもんな。・・・まあ、そういうのは、忘れてくれたらええし、水都が、何も覚えてないんやったら、それでええんと違う？」

「すつかりと、水都は二週間の記憶を飛ばしている。何をしていたか、わからないと言うのだから、千佳ちゃんのことも忘れているだろう。」

「薄情な人間やと思わんといてな？ あいつ、壊れてるから。」

「それは、おとついの夜に、イヤというほど理解した。で、あんたが、ものすごく冷静なんが、不思議ではあるけどな？」

「え？」

「だって、浮気されてさ、それで、その相手に冷静に、かかった費用の支払いを申し出てるって・・・なんぼほど、冷静なんよ？ 普通は怒るやろ？」

「いや、これが男とやったら、そうなるんかもしれへんけどな。あいつも、男やし、たまには、やってみたいと思てもしゃーないとは

思ってるから。」

女性とやってみたいと言われたら、はい、そうですか、と、俺は素直に認められる。俺では、相手にならないのだし、本来の行為としては、そちらが正しい。だから、それをやりたいと言われたら、止める理由はないからだ。

「つまり、浮気には該当せえーへんと？」

「せえーへんやろうな。だいたい、あいつ、俺に向かって、ソープで抜いて来い、とか、いつも言うてるからなあ。」

「ふーん、そういうもんなんや。勉強になったわ。」

「ほんま、自分、動じひんな。」

「それなりに場数は踏んでるから。ほほほほ。」

ネコの人は、初めてやったけど、と、千佳ちゃんは大笑いしてやってきたデザートプレートに手を出した。適当に、それを摘みつつ、「それでやな。」と、千佳ちゃんは、さらに笑った。

「水都もすごいけど、あんたも、すごいと言えはすごいで？ わかっ
つてないみたいやけど。」

「そうか？」

「だって、普通、私の名前とか素性とか確かめるやんか？ それや
のに、あんた、一言も尋ねてないんやで？」

「そうやったかな？ 千佳ちゃんが言わへんから、ええんかと思っ
てたんや。」

「ほら、そこや。あんたも水都も、そういうとこ似てるんちゃう？
他人に関心ないやん。」

そう言われても、ピンとくるものではない。元々、俺は、煩わし
い人間関係は面倒なので、適当に距離のある付き合いをしたいほ
うだ。それには、あまり他人に深入りするようなどは尋ねない。千
佳ちゃんが、どういう仕事をしているか、なんてことは、この際、
関係ないし、本名がわかったところで、意味がないと思っていた。

「そういうもんやろ？」

「普通は、そうではない。」

「なら、俺も変わり者ということであえわ。」

「充分に変わり者やわ、ネコの旦那。」

「おおきに、褒め言葉として受け取っとくわ。・・・あの、俺、そろそろ出て見ええかな？ あんまり遅くなると、あほが慌てるんで。」

「小一時間くらいは、大丈夫だと思うのだが、ボケている俺の嫁は、俺の言葉を理解したかどうか微妙だ。さっさと帰らないと、また、ふらふらと出て行きそうだ。一応、その支払いよりは、かなり大目の金額を、レシートの上に置いた。いらない、と、言われても、ガソリン代ぐらいいは出しておこうと思った。」

「律儀やな？」

「びつくりさせたお詫びも兼ねてる。ほな、これで。」

「ネコの人によく。それから、もし、また出張するんやったらな、これ、携帯やから。ネコの世話くらいはしたげる。」

「コースターに、すらすらと書かれた一連の数字は、千佳ちゃんの携帯ナンバーだった。だが、それは、「ごめん。」と、返した。」

「これはもらわれへん。もう、出張とかないはずやし、何度も、こんな真似させるわけにはいかへんから。・・・ていうかな、ちゃんとした付き合いを考えや、千佳ちゃん。こういうのは、よくないで？」

「じじむさい。」

「それが普通や。ほな、ほんま、おおきに。」

「これで、逢うこともない相手だ。よくもまあ、こんな女を引き当ててきたもんだ、と、水都のナンパに驚く。でも、こういう人だったから、余計な煩わしさはなかったともいえる。お礼を言うと、俺は振り返らず、さっさとファミレスを出て、スーパーに向かった。水都の様子では、そんなに量は食べないだろうが、せっかくだから、山菜のませごはんを作ってみるつもりだった。」

「出かけてくるで。」と、ぼんやりした脳みそに響いていたが、ほとんど聞こえていなかった。時間的に買い物だろうとは、起きてから気付いた。そろそろベッドは飽きたので、居間へ移動した。そこで、こたつの横に置かれている紙袋に目がいった。

……ん？……

どう見ても、俺のスーツとワイシャツで、なぜ、こんなものが紙袋に詰められているのか、少し考えた。

……え？……

二週間という時間を忘れたと思っていたが、思い出せば、それなりに蘇ることはある。家に帰るのが億劫で、千佳の家に転がり込んだ。そこまで思い出して、ここに、その時の衣装が戻って来ている。事実に、顔が青褪めた。

……バレてる……というか、どうなって、俺は、ここにおらんよ？……

千佳の家に居候していたのは、はっきりしている。満足できないながらも、やることはやっていた。それが、どうなったら、ここにいられるのか、今ひとつ理解できなくて、そこへ座り込んだ。

……千佳は？……

よくよく考えたら、なぜ、花月が、俺を探せたのかも疑問だ。行きずりの千佳の家なんて、花月は知らない。スーツの一番上には、俺の財布とか定期券とかが、ご丁寧に載っかっている。だが、これは現実だ。千佳とやったのでは、到底、痛まない場所が痛いのだろうか、昨日の出来事は本物だ。

……とりあえず、千佳と連絡とらなあかんのちゃうか？……

しかし、なのだ。千佳の連絡先なんて、俺は知らない。家の場所はわかるから、それなら、直接、確認して来るほうがいいか、と、服を着替えようと部屋に戻った。

入れ替わるように、花月が玄関から入ってきたので、もう一度、部屋の外へ顔を出した。

「おう、起きたか？」

花月は、何も変わっていない。いつものように、スーパーの袋を手にして笑っている。

「・・・あんな・・・」

「うん、なんや？」

「俺、女の家におったはずやけど、なんで、ここに帰ってるんやろ？」

紙袋を指し示して、俺は花月に尋ねた。指差す方向を目にして、花月も、「あつ」と、声を出した。それから、残念そうに、「思い出したか。」と、言い出した。

「思い出すも何も・・・おまえ、なんで、俺を探せたんよ？」

「いや、あちらさんから返品依頼が来たから引き取ったんや。」

「千佳が？」

「そう、その千佳ちゃんが、『なんで求婚されなあかんのじゃあつ』

と、うちの家に抗議に来やはった。」

「あ？」

「それで、俺が引き取りに出向いて、千佳ちゃんに配送してもらた。さつき、その服を、千佳ちゃんが、さらに届けてくれたわけや。以上。」

「そんなん知らん。」

「そら知らんやろつ。おまえ、俺が出向いたら、『あんた、誰？』って言いやがったくらいや。」

花月の言葉に、さすがに、自分の記憶を疑った。まさか、そんなことを言うはずがない。だが、同居人の顔は真顔で、事実であると訴えている。

「なんで？」

「まあ、しゃーないやろ？俺がおらんから、俺自身を抹消したんやと思うで、おまえの脳みそ・・・しかし、よう、あんな女、ひ

っかけたな？ おまえのナンパ技術に感心したぞ。」

怒っている様子ではない。呆れ果てたという顔で、スーパーの袋から荷物を取り出し出している。冷蔵庫に、とりあえず、荷物を整理して、パタンと扉を閉めた。

「水都、女とやりたいというのは、当たり前のことや。せやから、それについては、俺は怒るつもりはない。だいたい、おまえが俺に対して、『ソープへ行け。』と、言うてるんやから、そういうもんやろう。」

ただ、求婚はいただけへんよ、と、低い声で言っただけだ。

「求婚したんか？ 俺。」

「うん、十日ぐらいで求婚したらしい。・・・遊ぶのは、かまへん。せやけど、それ以上はあかん。おまえは、俺の嫁に永久就職してるから、それは認められへんからな。それだけは覚えとけよ、水都。」

真剣に、俺の前に立って花月に告げられた。謝るのが正しいと思うのだが、俺には、その記憶がない。

・・・そのままほっといたらよかったのに・・・

そう呟いたら、ペチンと軽く頬を叩かれた。

「何度も言うてるやる？ それで、千佳ちゃんが、求婚受けて結婚してくれて、おまえは、ほんまに幸せなんか？ 違うやる？ おまえ、千佳ちゃんに興味なんかないやんけ。ただ、千佳ちゃんが嫁という立場にいる人という認識であって、好きとか傍におって欲しいとかでもないやる？ そんなん、千佳ちゃんにも失礼やし、生まれとくる子供にも迷惑や。・・・おまえは、俺の嫁で、俺が、ずっと傍にいて欲しいと願ってるから、この形でええねん。わかったな？ それだけは忘れんくれ。もし、忘れても確実に思い出させて連れて帰ってくる。なんべんでも試したらええわ。俺は、それでも諦めへんからっつ。」

真剣に宣言されて抱き締められた。強すぎて、肺が圧迫されて苦しいほどだ。

・・・あほなやつ・・・わざわざ、厄介ごとを引き受けるようなも

んやのに……

壊れている俺は、何度でもやるだろう。やっても、覚えていないし、たぶん、その場合、花月の顔すら、綺麗さっぱりと忘れてしまうのだろう。お互いに、それで別れたら、すっきりするだろうに、花月は、それはしないと云う。変わった男やと思っていたが、これほどとは思わなかった。

「おまえ、あほやる？」

「おまえほどではないわ。」

水都の言葉と態度は違う。抱き締めた身体は、細かく震えて、そして、俺の背中に手を回している。どうあろうと、おまえは、俺が必要やと思っているんなら、それでええ。奥底の水都は、それを望んでいるのだと、俺は知っているから、どつという態度であっても、怒るつもりはない。

「千佳ちゃんに言われたけど、俺ら、似たもの夫夫らしいで？」

「どこがじゃっつ。俺、おまえみたいに、しつこないわっつ。」

「いや、そこやない。おまえも俺も、他人に無関心らしいわ。」

「……ああ……それはそうかもしれへんな……」

他人と認識しないのは、俺にとって水都だけやし、水都にとって俺だけということだ。だから、それでいい。

「メシ食うか？」

「……うん……」

いつものように、ふたりして食事の支度をした。また、いつもの生活に戻る。それが、延々と続けば、問題はない。

永遠なんてものはない。

だが、続けることはできる。

続けていれば、それなりに永遠に近いものになるのだはないかと思う。

まだ、始まったばかりだから、お互いに、他人ではないという認識

カニの殻を砕いて。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7151p/>

永遠

2010年12月30日12時09分発行